

名称 (ネーミング) が持つ力



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化プロデューサー(地域活性化伝道師)・場所文化機構代表

1959年帯広市生まれ。米国に留学中に、ベンチャー企業(東京)にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーのセールスプロモーションを担当。86年に地元・帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台(帯広)、フィールドカフェ(十勝)、場所文化フォーラム(東京)、とかちの…(東京)、にっぽんの…(東京)などの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立等に関わる。現在も、全国各地を飛び回り、地域づくりの講演、企画・提案、実践を行っている。

“温州みかん”などの名称の由来は

ビタミンC等が豊富で風邪予防に効くという話もあり、冬の果物の主役はやはりミカン。手で皮をむいて食べられる手軽さも人気の要因だが、つい食べ過ぎてしまい、肌が黄色くなった経験は誰にでもあるだろう。

このミカン、一般的には温州みかんのこと。「ウンシュウ」は柑橘の名産地であった中国浙江省^{せつこうしょう}の温州から取ったものだが、実は原産地ではなく、商品販売戦略として付けられた。ミカンの原種はインド東北部のアッサム地方の近辺にあったとされており、日本には小ミカンという種類が中国経由で伝わってきた。最初に栽培したのは、中国との交易港として古くから栄えていた肥後国八代(現熊本県八代市)。その後、小ミカンが突然変異し温州みかんが誕生したと考えられている。(今から70年ほど前に樹齢3百年の温州みかんの古木が鹿児島県長島で発見されている)その後、紀州有田が一大生産地に発展し「紀州みかん」の名が広まり、江戸でも大人気の果物となった。静岡も産地だが、その起源は家康が駿府城に隠居したときに紀州から取り寄せ植えさせたことにあるという。ちなみに、日本にはタチバナ、沖縄にシークワサーという柑橘が原生していたが、食用にはなっていなかったようだ。

そのミカンも輸入のオレンジやグレープフルーツ、さらに国内でも糖度の高い品種が出てきたため、生産量は大幅に減少している。確かに、私たちが目にするミカンの種類は増え、色もオレンジだけでなく黄色もあり、名前も覚えられないほど多様になっている。

オレンジに対抗する日本の柑橘の代表といえば「伊予柑」。先日、その「伊予」の国(伊予市)に行った。日本ミカンの上品な甘さを持ちながらも、オレンジに負けない風味があり、一躍人気になった伊予柑。その名が付いているのだから、当然ここが原産地かと思いきや、実は山口の萩。当初は穴門みかん^{あなと}と称していたが、その後、伊予での生産量が増え、産地として定着したことから、「伊予柑」と称されるようになった。

※ 浙江省(せつこうしょう)

東シナ海に面し、北は江蘇省^{こうそしょう}と上海市、南は福建省と接する。省都は杭州市。

私は、温州みかん、伊予柑のどちらも原産地名が付いているものと勝手に思い込んでいたが、皆さんはこのことを知っていたらどうか？

“栄養”の語源はどこから

その伊予市に「栄養」という名を持つ寺院がある。寛永14年（1637年）に伊予地域を拓いた宮内家の菩提寺として建てられたものだが、私たちが毎日のように耳にしている「栄養」はこの寺の名から付けられたらしい。「らしい」というのは具体的な証拠がないからだが、栄養寺の高橋住職の話は説得力がある。

栄養の名付け親は、伊予出身の佐伯矩博士。佐伯博士は、日本で医学を学んだ後、米国に留学し、米国政府の技師や医大の講師を務めながら知識を深める。その後、欧州に渡り、各国の栄養問題の現状を視察して日本に戻る。その2年後の大正3年（1914年）、東京に世界初の栄養学研究所を私設した。医学から栄養学を独立させた、まさに栄養学の父といえる大人物。当初、文科省は「えいよう」を「營養」と記していたが、佐伯博士の進言を受け、大正7年に「栄養」に統一されたということだ。高橋住職いわく「残念ながら、佐伯博士が栄養寺から名称をもらったという記述はどこにもなく、推測の域を出ない」ということだったが、このお寺の近くに住み、子供のころから耳なじみがあり、文字にも親しんでいただろうことを考えると、やはりこの栄養寺が「栄養」の発祥の地だといえると私は思う。

余談だが、善養寺、真養寺など「養」の字を持つ寺院は全国に複数あるが、栄養寺は一つしかないということだ。現在、伊予では、この寺院を地域活性化の一つの場所にできないか模索中である。

ネーミングが持つ力

ミカンの名称、寺院の名称について書いてきたが、まちづくりに関わっていると、「名称（ネーミング）」が持つ力が大きいことを感じる。特に「地名」が持つ力。大分の湯布院は温泉地として全国トップに君臨する存在。もちろん、さまざまな苦勞があつてこの地位

を築いたのだが、改めて「湯布院」という地名を見ると、質の高い温泉地として本当にふさわしい名称だと思う。その湯布院の隣に、ファームインで全国的に有名な「安心院」がある。「あじむ」と読むのだが、この地名を見ただけで、安心・安全なイメージが勝手に浮かんでくる。

身近な所でいうと、とかち帯広空港のすぐ近くにある「幸福駅」。もともとは幸震という地名が付けられていたが、福井からの移住者が故郷の名を1字付けた「幸福」を集落名としていたことからこの地名になった。北海道の厳しい開拓生活の中にあつて、自分たちの思いをこの地名に託したのだろうが、二つ隣の地名（駅名）が「愛国」だったこともあり、何の特徴もない地域と駅舎はこの名前のおかげで全国ブームとなり、最盛期には1年間に300万枚の切符を売りあげた。ブーム時の勢いはないが、今も「幸福」という名に引かれ、多くの人がこの駅を訪れている。

このほかにも、お金に係る地名の「銭函」、頭髪の悩みを持つ人が興味を持つ「増毛」、商品名と同じということでコマーシャルにも使われた「比布」、歌手が喜びそうな「美唄」など、道内にも力のある地名が幾つもある。北海道はアイヌ語が元になっているのでユニークな地名が多くあるが、漢字を使わず、音で表現している地域もある。ニセコ、トマムなどがその代表例だが、カタカナで書かれた地名を見ると、つい外国の町のイメージを持ってしまう。

そう言えば、自分の子の名を付けるときに“名前は親が子に与える最初で最大の贈り物”だと思い、何日も真剣に悩んだことを思い出した。

地場商品の開発も重要だが、自分たちが暮らす地域の名称に今一度目を向けてみることも必要ではないだろうか。たかが言葉遊び、語呂合わせ、音のイメージかもしれないが、そこから地域の新たな価値や可能性が見えてくるように思う。